

「ミスト」

—初稿—

2025/7/11

雨森 れに

〈人物表〉

須藤 すどう
清貴 きよたか

(42) 肉屋の主人。大柄。

須藤 すどう
葵 あおい

(39) 清貴の嫁

※『ミスト』ステイヴン・キング著からタイトルをお借りしました。

1. 山（昼）

ところどころガスが出ている活火山。
鬱蒼としているが、火口に近い山頂部は岩石地帯になっている。

2. 商店街（昼）

山間部にある、人口の多い町の商店街。
その一角に肉屋があり、客が長蛇の列をなしている。
客は外国人や自然派な服装の人間ばかり。

3. 肉屋・店内（昼）

ショーケースに様々な肉が並んでいる。
客が「自然ハム」というハムを指さす。

大きくポップが添えられ、そこには「ヴィーガン対応」と書かれている。100グラム500円。

欧米系の外国人客がハムを指さし、

客① 「イツツワン……ノ、スリー！」

電子秤に分厚いハムが300グラム乗せられる。

次の客が来る。ターバンをつけた日本女性。

客② 「これ、500。200と300にわけて」

電子秤にハムが乗せられる。

客は途切れない。

次々に計り、会計していく須藤葵（39）。

中東系外国人客が来る。

客③ 「コレ」

葵 「何百グラム？ って、ちょっと待ってくださいね」

葵はハムがなくなりそうなことに気づく。

奥にある厨房側に向かって叫ぶ。

葵 「アンタァ！ ハム追加！」

不機嫌な須藤清貴（42）。色の悪い豚肉にネットをつけている。

清貴 「今日はそれで終わり！ あとは3日後！」

葵は怒りだしそうになるが、客の手前抑える。

葵 「すみません。これで最後です」

客③ 「イイよ。ゼンブください」

ショーケースの内側から、ハムの値札が下げられ、
「SOLD OUT」の札が置かれる。

並んでいた客らが非難めいた声をあげる。

ショーケースに近い者はガラスを叩き、外にいる者は信じられないという雰囲気。

葵 「うるさーい！」

葵がショーケースの天板を叩く。

葵 「他にもあるんだから、他のでいいでしょ！」

客④ 「……ヴィーガン」

ひとりが呟き、次は口を揃えて「ヴィーガン」とブーイングし始める。

葵が、またショーケースの天板を叩く。

しかし、今度はブーイングが止まらない。

葵 「今日はもうおしまいっ！」

客らを押し出し、電動シャッターを下ろす。

4.

肉屋・厨房（昼）

厨房の中央に挽肉用の機械と作業テーブルがある。

そこで清貴がひき肉を作っている。角切りにされた

肉はどれも変色しているが、清貴は気にせず機械へ入れる。

葵が厨房に来る。

葵 「ハム、明日になんないの」

清貴 「無理無理。段取りが決まってんだから」

葵 「今から行ってきた」

清貴 「今から？ 俺、死ぬよ？」

葵 「ハムが増えるのは大歓迎」

葵と清貴が睨み合う。

葵 「とにかく少しいから。行ってきたよ」

清貴 「（小声で）1日や2日のことでうっせえな」

葵がテーブルを叩く。

清貴が舌打ちし、その場を離れる。

途中、ゴミ箱を蹴るが葵は驚かない。

5. 山（昼）

山の麓。誰も来ないような荒れた場所。

古いバリケードがある。

バリケード前にトラックが停まる。

× × ×

清貴が山道を歩く。

登山リュックとクーラーボックスを持っている。

近くの木の子にはリスがおり、清貴を見ている。

清貴が立ち止まる。

先には岩石地帯。ガスで霧がかっている。

近くの木に捕まり、岩石地帯の様子を伺う。

先ほどのリスが木から降りて、岩石地帯へ走っていく。

清貴は、岩の隙間に小鹿が倒れているを見つける。

気合を入れ、防毒マスクとゴーグルを装着。

ガスに注意しながら、そろりそろりと歩き出す。

10メートルほど離れた場所からガスが噴き出す。

噴き出したガスに乗って、リスの死骸が落ちてくる。

清貴は悲鳴をあげながら、走る。

転がるようにして鹿の所に到着。鹿は息絶えている。

2メートルほど先からガスが噴き出す。

清貴、鹿を抱いて走り出す。必死の形相である。

× × ×

鬱蒼とした山の中。

ぜえぜえという息遣い。

清貴は仰向けに寝転んでいる。

隣の鹿を見る。

安心したように、大きく息を吐く。

6. 肉屋・厨房（夕）

テーブルの上にバットがあり、三十センチほどの肉塊がある。

葵が肉塊を見下ろしている。

目だけを動かし、隣にいる清貴を見る。

清貴はどこか誇らしそうな笑顔。

葵 「これだけ？」

清貴 「小鹿だからな」

葵 「これっぽちでどーしろって」

清貴 「いやいやいや。少しでいいって言ったよな？」

葵 「こんなんハムにしたら一瞬でなくなるでしょ！」

葵 がテーブルを叩く。

葵 「頭に中身詰まってんの？」

清貴 「（カチンときた様子で）じゃ、じゃあお前が行けよ！」

清貴 も負けじとテーブルを叩く。

葵 が更に威嚇するようにテーブルを叩く。

葵 と清貴は交互にテーブルを叩き続ける。

肉塊の乗ったバットが徐々に動き、落ちる。

葵 と清貴、絶望の表情。

× × ×

清貴 ができたてのハムをテーブルに置く。

葵 は椅子に座って、清貴を睨んでいる。

清貴 「3秒ルールに感謝しろ」

葵 「アンタには感謝できないけどね」

清貴、苛立ちを押さえながら、

清貴 「今日からガスが強くなって、明日の夜にはガスが引ける。

それで材料がゴロゴロ……段取りがあるだろうが」

葵 が鼻を鳴らす。

葵 「ヴィーガンと一緒にで、自然に落ちている材料を使ってる」

清貴 「そうそう。まさに自然ハム。だからの段取り——」

葵 「（ため息で遮る）それを量産するのが商売でしょうが」

葵 と清貴が睨み合う。

しかし、葵 が先に目を逸らす。

清貴 「お前の頭の中のが見てやりたいわ」

葵 は答えず、燻製室に近づき、扉を開ける。煙が厨

房に揺蕩う。

葵 がこつそりと、扉外にある鍵を中途半端な角度に

回す。少しの衝撃で施錠されるように。

葵 「ちょっと。この中、おかしくない？」

清貴 「は？ 急になんだよ。さっきは何ともなかったけど」

清貴が燻製室に入る。

葵は扉から距離を取る。両手を後ろで組んでいる。

葵 「いつもより煙が少ないんじゃない？」

清貴 「わっかんねえな。どれ」

清貴が内側から扉を閉める。

鍵のかかる音。

清貴が小窓を見る。

扉から離れた位置で葵が笑っている。

鍵が開かないことを確認し、焦り始める。

扉を叩きながら、

清貴 「おい！ 鍵！」

葵が扉に近づく。

葵 「うるさい」

葵、扉を叩く。

清貴の動きが止まる。

葵 「私だってハムぐらい作れるわけ」

葵、燻製室の温度を上げる。

清貴、意味を理解し、扉を叩く。

清貴 「そんなの人殺しだろ！ ヴィーガンじゃねえだろ！」

葵 「私が鍵かけたわけじゃなし」

清貴は扉が熱くなり、叩けなくなる。

葵が煙の量を増やす。

清貴の怒声が響く。

葵側から見た小窓は、煙で何も見えなくなっている。

7.

肉屋・店内（昼）

ショーケースに並ぶ、大量の「自然ハム」。

おわり